

【1. 日本側拠点機関名】

東京外国語大学

【2. 日本側コーディネーター氏名】

品川大輔

【3. 日本側協力機関名】

京都産業大学，大阪大学，国際基督教大学，東京女子大学

【4. 研究課題名】

アフリカにおける言語多様性とダイナミズムに迫るアフリカ諸語研究ネットワークの構築

【5. 研究分野】

アフリカの諸言語を対象とした言語記述研究，また社会言語学的研究

【6. 実施期間】

平成 30（2018）年 4 月～令和 4（2022）年 3 月（4 年間）

【7. 交流相手国との中核的な国際研究交流拠点形成】



写真 1：ドドマ市（タンザニア）でのゴゴ語調査セッション

主たる交流対象の研究機関はダルエスサラーム大学（タンザニア），ヴェンダ大学（南アフリカ），マケレレ大学（ウガンダ），ボツワナ大学（ボツワナ），ザンビア大学（ザンビア）の 5 研究機関であり，これら研究機関に属する研究者と連携する形でアフリカ諸言語の記述研究のための国際研究ネットワークを構築した。とりわけ，ダルエスサラーム大学（UDSM）とヴェンダ大学（UniVen）との間で，中核的な国際研究交流拠点を形成した。

UDSM においては，アフリカ諸

語の言語ドキュメンテーション研究促進に向けた技術協力のために，フィールドワークによる言語調査に有益なコンピュータプログラム（音声分析プログラム Praat，形態素分析支援プログラム FLEEx，レキシコン作成プログラム Lexique pro）に関するワークショップを行った。この機会をとおしたネットワーク形成によって，現地民族語であるゴゴ語の未記述変種を対象とした調査プロジェクト（写真 1）を立ち上げるとともに，タンザニアのリフト・バレー・エリアにおける語族を超えた言語接触に関する国際的研究ネットワークの構築にも寄与した。



A workshop to improve database of African languages is currently underway at UNIVEN
9 months ago



写真 2：UniVen におけるデータ収集 WS は大学公式サイトで紹介された

一方 UniVen とは、南部アフリカで話される 6 つのバントゥ系言語（ヴェンダ語、ツォンガ語、スワティ語、北ソト語、南ソト語、南ンデベレ語）の形態統語論的な特性に関する網羅的なデータ収集セッションを行った。2 週間にわたるワークショップ（写真 2）には、UniVen に拠点を置く 7 名の研究者、同大学に籍を置く 10 名以上の調査協力者、さらには外部からの専門研究者（南ア・フリーステート大学、英国エセックス大学）を含む総勢 20 名以上が参加し、現在のバントゥ諸語類型論研究に資する水準の記述データを収集した。収集したデータは資料集として出版されるのみならず、その録音データはデジタル・アーカイブとして公開され、国際的なバントゥ諸語研究コミュニティに対して貴重な資料的貢献をなしている（写真 3）。

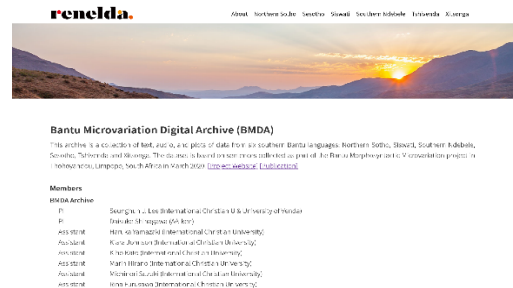


写真 3：南部バントゥ諸語 6 言語のデータアーカイブ (<https://renelda.aa-ken.io/>)

【8. 次世代の中核を担う若手研究者の育成】

本プロジェクトには、複数の若手研究者および大学院生が参画した。日本側参加研究者に限っても 3 名の若手研究者が 10th World Congress of African Linguistics や 8th International Conference on Bantu Languages (ともに 2021 年開催) といった国際的発信力の高い研究会議の場で研究成果を発表している。

【9. 研究の背景・目的等】

アフリカは、約 7,000 を数えると言われる世界の言語のうちの約 30%に相当する 2,000 言語以上を抱える多言語大陸である。そしてそこに住む人々は、自らの母語以外にも、異言語間コミュニケーションのために発達した広域共通語（リンガ・フランカ）を含む複数の言語を話す多言語話者であることが一般的である。しかしこの言語多様性は、多くの民族語について未だ十分な記述研究がなされていないという意味で、学術的にその全貌を把握しているという水準には至っていない。そのような状況をふまえ、本研究計画は、現在アフリカ大陸で話される、とくに研究蓄積が少ない民族語を対象とした言語記述研究を推進するとともに、日本およびアフリカの若手言語学者の育成をととして、アフリカが有する文化的資産としての言語多様性の維持・促進に貢献しうる、国際的研究拠点および拠点間ネットワークを構築することを目的としている。

【10. 成果・今後の抱負等】

本プロジェクトの成果は多岐にわたる。上述の UDSM および UniVen におけるワークショップの開催、その成果としての記述資料集の出版、アーカイブサイトの構築に加え、日本側拠点およびアフリカ側拠点双方のプロジェクトメンバーによる研究成果の刊行媒体としての *Working Papers in African Linguistics* (WoPAL) の立ち上げとその vol. 1 の刊行、また社会貢献的な成果として、WHO による COVID-19 に関する基本情報の世界の諸言語（2022 年 2 月段階で 125 言語）への翻訳と発信を行うウェブサイト “COVID-19 Myth Busters in World Languages (<https://covid-no-mb.org/>)” への翻訳情報の提供なども含む。これらすべての成果はプロジェクトサイト (<https://sites.google.com/view/renelda/home>) からアクセスが可能である。そして、本プロジェクトによって構築された国際的研究ネットワークおよび WoPAL などの出版事業は、後継プロジェクトに位置付けられる JSPS 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))

“Microvariation in Bantu languages of South Africa: building theories from typology data”, また東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「多言語混在状況を前提としたアフリカ記述言語学研究の新展開」といった新たな共同研究の枠組みに継承されていく。